ふるさとコミック

# 伊東むかし物語

～伊東祐親とその時代～

NPO法人
伊東市文化財史蹟保存会

コミック 松久 壽仁
シナリオ 綿引 勝美
島田 眞之

## ふるさとコミック「伊東むかし物語」の紹介

伊東祐親公は伊豆、伊東の歴史とは切っても切れない重要な歴史上の人物です。
明治以前の日本で、伊東の存在が多くの人々に知られたのは、
伊東祐親と「曽我物語」のおかげと言っても過言では有りません。
歴史の上で、伊東が最も輝いた時代をひも解く上で、当コミック本は、
最善の参考書と自負しています。

ここに、「伊東むかし物語」のダイジェスト版を紹介します。

## コミック「伊東むかし物語」の制作関係者

企画・制作　ＮＰＯ法人・伊東市文化財史蹟保存会
編集制作　メモリーバンク株式会社
著　　者　コミック　松久壽仁
シナリオ　綿引勝美
　　嶋田眞之

## ご購入問い合わせ

ＮＰＯ法人・伊東市文化財史蹟保存会
〒４１４－００３８　静岡県伊東市広野４－４－１９
電話番号０５５７（３６）７７２６

# ふるさとコミック
# 伊東むかし物語 ～伊東祐親とその時代～

## 目次

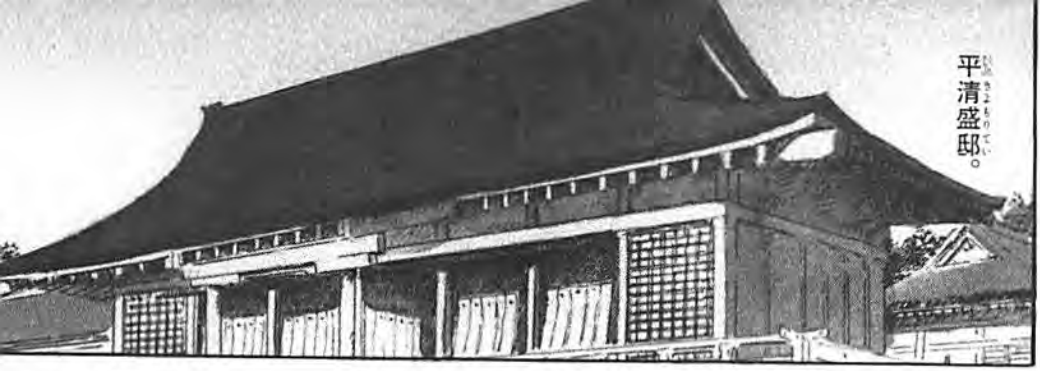

発刊に寄せて ―― 2
ふるさとコミック『伊東むかし物語～伊東祐親とその時代～』
プロローグ　火の国　伊東 ―― 5
第一章　悲劇の始まり　頼朝配流と伊東一族 ―― 13
伊東市歴史ミニガイド
頼朝と八重姫との悲恋が生まれた伝説の地・伊東 ―― 52
第二章　祐親の最期　頼朝の旗上げ ―― 53
伊東市歴史ミニガイド
所領争いに巻き込まれて落命した河津三郎祐泰！ ―― 92
第三章　曽我兄弟の物語　命をかけた仇討 ―― 93
伊東市歴史ミニガイド
語り物から歌舞伎まで、国民文学の『曽我物語』 ―― 132
エピローグ　その後の伊東一族 ―― 133
伊東市歴史散歩
観光伊東のルーツ・伊東一族の残した史蹟探訪記 ―― 141

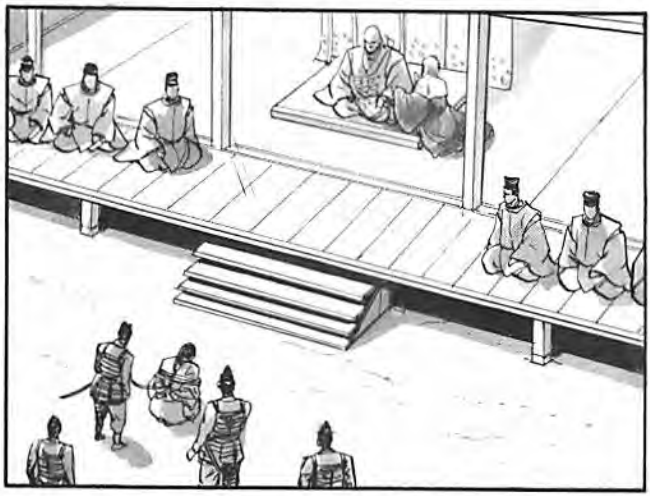
▶物見塚公園に立ち伊東湾を見下ろす伊東祐親公の像。

我こそは伊東入道祐親にて候う
初代家次（祐隆）が伊東に住まいしてより
数えて三代……
父祖より伝えられし伊東荘を守らんがため
生涯いたした我が生きざまと
我らが一族の物語を語ろうと存ずる
いざ聞き候え……!!

# 第一章 悲劇の始まり

## 頼朝配流と伊東一族

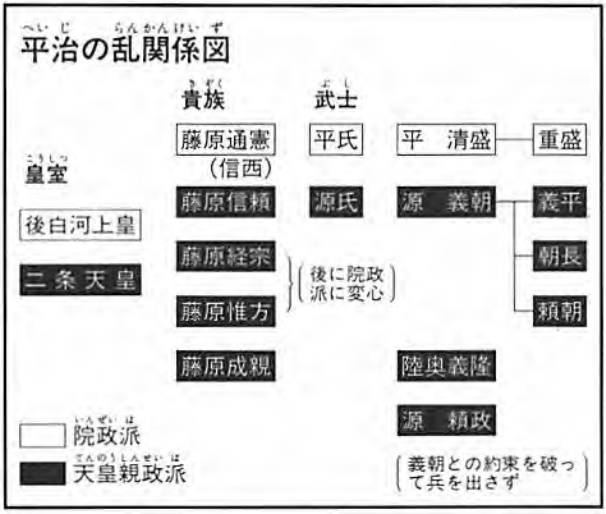


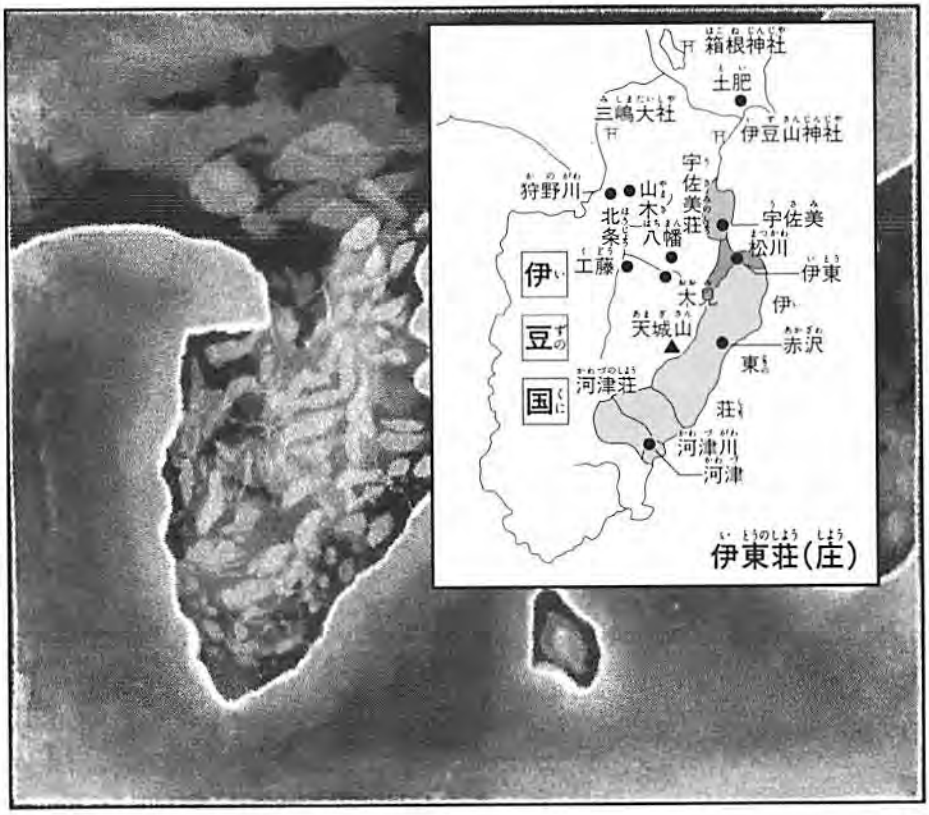


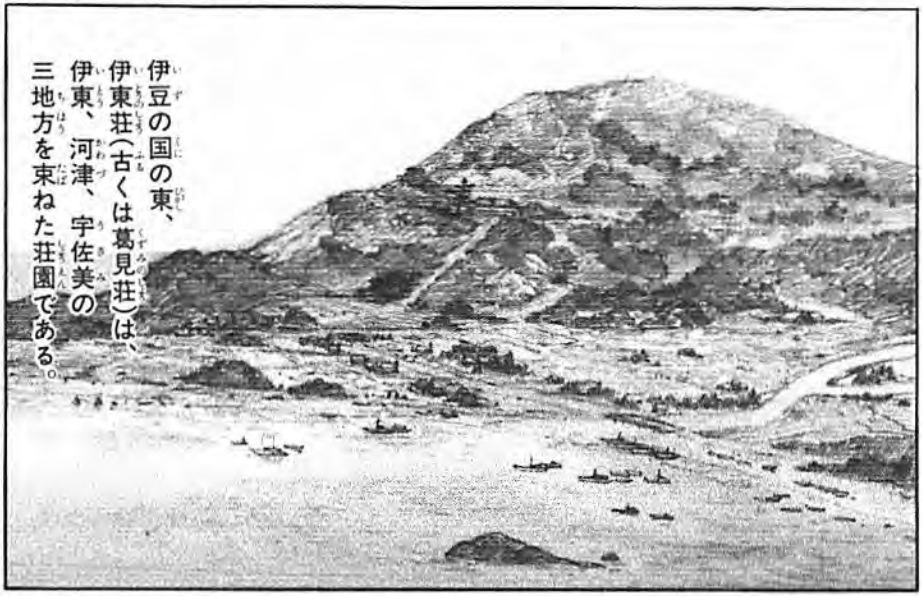
●清盛の継母である池禅尼は、頼朝が亡くなった子の家盛に似ていることもあって助命の嘆願をした。また、池禅尼が頼朝の生母の父の熱田大宮司・藤原季範の親族であったことも見逃すことができない。

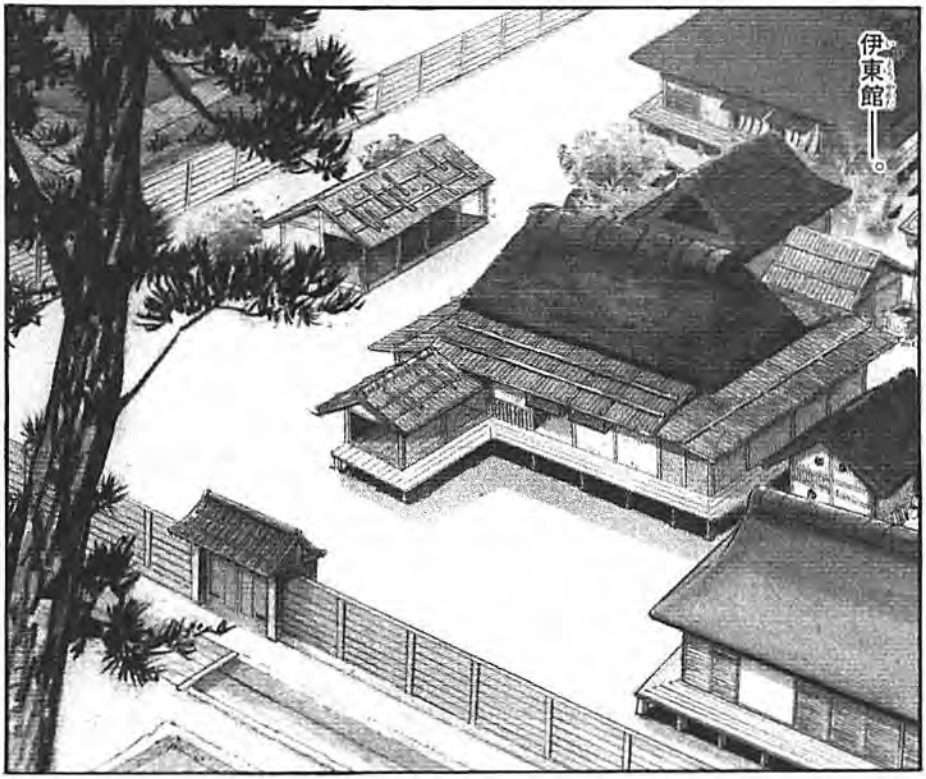
●伊東荘は葛見荘として、伊東家次（別名、工藤祐隆）が東伊豆一帯を支配して、荘園を整えたことから生まれた。「くずみ」は他に蔕見、玖須美、玖須見、久須美、久津見などの字が当てられている。家次は狩野荘からこの伊東の地に移ってきた。

頼朝が配流されることになる伊豆国（豆州ともいった）は、常陸・佐渡・阿波の国々とともに重罪人を流す遠流の国とされていた。奈良・平安時代から配流が行われたが、流人たちの伊豆での生活はわりあいに自由だったといわれ、流人たちによって都の文化がもたらされたといってよい。






●家次の祖父・工藤維織が押領使(平安時代の役人の一つで、反乱を鎮圧するのが役目)として伊豆に着任して以来、その子孫が伊豆に定着したのが伊東氏の始まりだ。維織は狩野に本拠を置いて狩野氏をとなえた。

永暦元年(1160)、源頼朝、伊豆に配流。この時十四歳。
御身の世話を仰せつかった伊東祐親でござる
顔をあげられい頼朝殿
伊東祐親

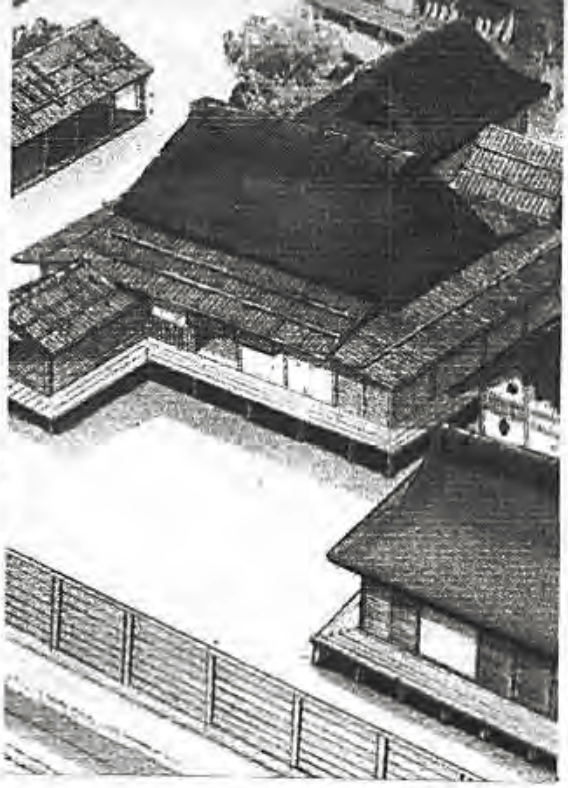
●源頼朝は「右兵衛佐」の位にあったことから「佐殿」の異名で呼ばれていた。

**祐親をめぐる親戚関係**

- 家次（祐隆）
  - 伊東祐家（若死）
    - 女（曽我祐家の妻）―― 曽我祐信（曽我兄弟の養父）
    - 祐親
      - 女（一説に北条時政の先妻）
      - 河津三郎祐泰（妻は狩野茂光の孫娘）
        - 十郎
        - 五郎
      - 伊東九郎祐清（妻は比企尼の娘）
      - 女（三浦義澄の妻）
      - 女（初め工藤祐経、後に土肥遠平の妻）
      - 女（通称八重姫・頼朝との恋）
      - 女
  - 狩野茂光 ―― 親光 ―― 女（後に河津三郎の妻、曽我兄弟の母）
  - 伊東祐継（母は水草）
    - 工藤祐経 ―― 伊東祐時（妻は土肥遠平の娘、祐親の孫娘）
    - 宇佐美祐茂（一説に狩野茂光の子という）

※右の関係図は、『伊東市ゆかりの伊東一族の人びと』（加藤清志著）を参考にしました。

●比企尼は頼朝の乳母の一人だったが、伊豆に流罪中の頼朝の経済的な援助はもとより、強い精神的な支えとなっていた。その長女は頼朝側近の安達藤九郎盛長の妻となり、三女は伊東祐親の次男の祐清の妻となって裏から頼朝を支えていた。



●伊東祐親には四人の娘がいた。一の姫が三浦介義澄に、二の姫が土肥遠平に嫁いでいる。その三の姫が頼朝の愛した八重姫といわれている。

●祐親を陥れようと狙う祐経の目を怖れ、千鶴丸の死体が上がらぬようにし、その「死」の噂を広めたともいう。

# 第二章 祐親の最期

## 頼朝の旗上げ

●千鶴丸を殺され、頼朝との仲を裂かれた八重姫は世をはかなんで自殺したとも、頼朝を追い北条の地まで行き追い返されて自殺したともいう。

また一説によれば……、
すべてに絶望した八重姫は、
我が身を真珠ケ淵に
投じたとも伝えられる。

●韮山の真珠院には「八重姫主従七人の碑」が建てられているほか、大仁の田中山の女塚の伝説のように、五人の侍女とともに自殺したのを祭った塚まで伝えらえている。

東林寺、祐泰の墓所――。
長男の祐泰が工藤祐経の家来の
手に掛かってから四年……。
虚無感から剃髪し
出家した祐親の心の痛みは
消えぬままだった……。

あの時　狩倉など
催さねば……祐泰を
死なすこともなく
孫の二人も手放さずに
すんだものを――

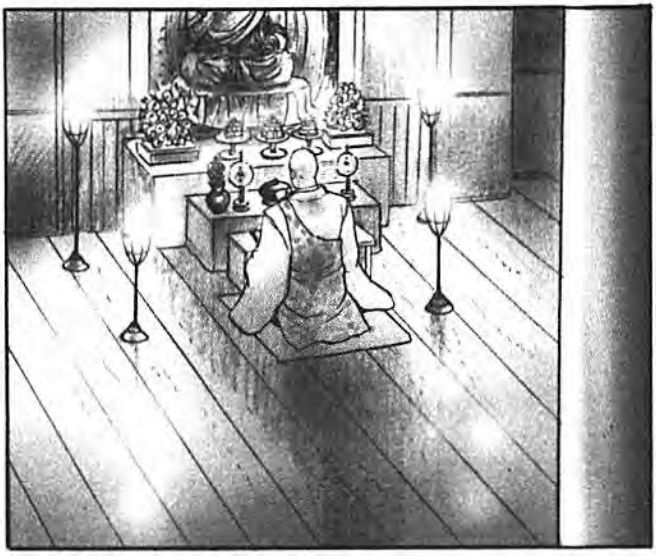
●文覚上人は鎌倉時代初期の僧で生没年ははっきりしない。はじめ遠藤盛遠と名乗る武士だったが、のちに出家し、罪を犯して伊豆へ配流された。

蹶起ぞ！
源氏の嫡男　源頼朝の名で
挙兵の命令を伝えに走れッ!!

ははッ!!

八月十七日、
三嶋神社の祭礼日――。

●源頼政敗死で伊豆国は平時忠が知行。その目代が平兼隆だが、山木（韮山町）に住んだため山木と称した。



三日三晩 食事も取られずに……
父上は いったい何を……?

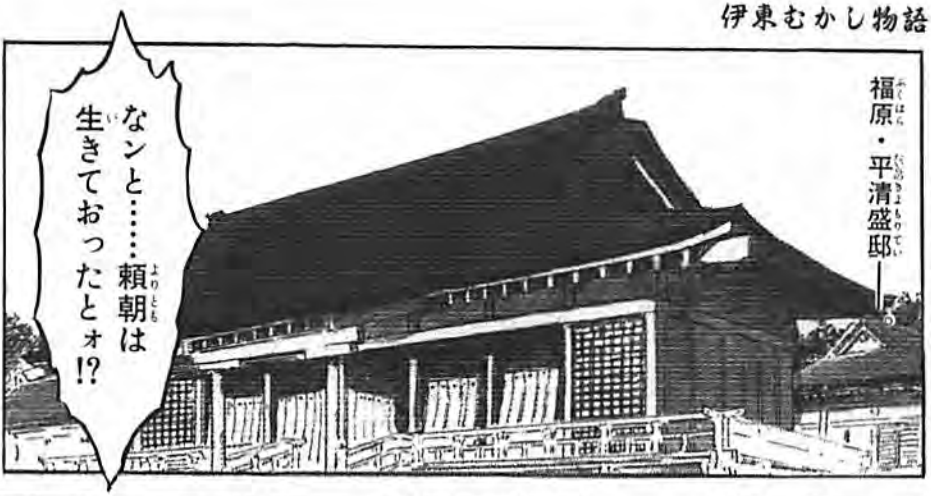
受けた御恩は御奉公で返さねばならん……

……!?

祐清……わしは平氏の手勢として戦いに参加する……!

父上ッ……!?

●石橋山の戦いで頼朝軍を撃破した大庭景親は、平氏方に頼朝戦死を報告した。しかし、その後の頼朝の活動の情報に驚いた平氏方は2万の大軍を派遣した。



皆の者
鎌倉に出立ぞ!!

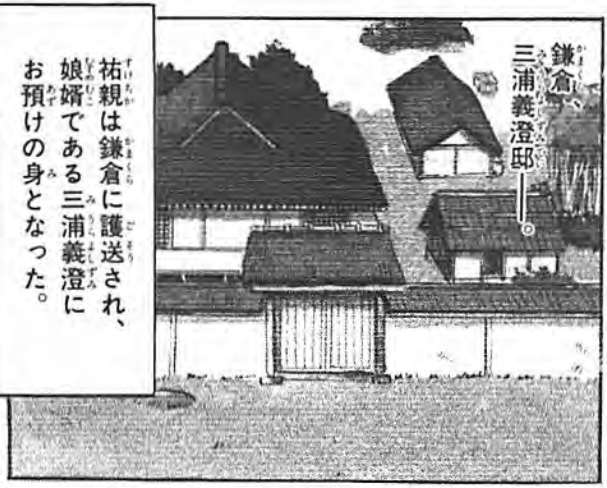
鎌倉は交通の要所でありながら、
一方は海、三方は山の要害の地である。
それにもまして頼朝の父の義朝が
根拠地とした源氏所縁の地……。

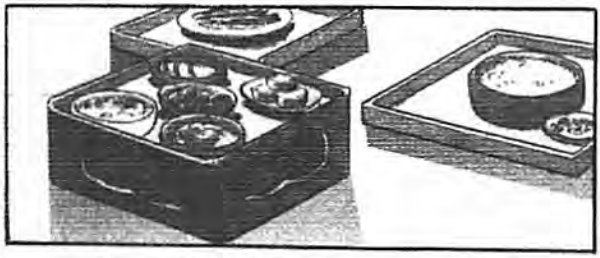
鎌倉を目指す大軍勢の迫力に、
平氏方にいた畠山重忠や
江戸氏……豊島氏、足立氏、
葛西氏らも加わり――、

十月六日、鎌倉に入った時には、
その軍勢は三万人にもなっていた——。

●関東の武士たちがなだれをうち頼朝軍に加わる中でも伊東祐親は平家方の立場を捨てない。伊豆大島の為朝討伐時に活躍した水軍で、富士川に陣する平家軍に合流しようとした。

ドドドド
うろたえるなッ!!
それでも平氏の御恩を受けた武士かッ!?



●伊東祐親親子は、現在の南伊豆町の小稲付近にあったと思われる鯉名の港で風待ちしていた所を、天野遠景の手で捕えられている。その後、頼朝陣に連れていかれた祐親は娘婿の三浦義澄に預けられている。

●祐親の自害を残念に思った頼朝は、祐清を呼んで褒美を与えようとしたが、祐清は父が死んだ今は頼朝に奉公する気はないとしてゆるされた。そこで父の志を継いで平氏軍に加わり、寿永二年（一一八三）五月に北陸で戦死したといわれる。

伊東荘の平和を
命がけで守ろうとし、
平氏への恩義に生きた伊東祐親の
意地を貫いた最期だった――。

第三章 曽我兄弟の物語
命をかけた仇討

うらやましくなんかないさ！
私たち二人には母上と
優しくしてくれる
継父上がいる……

育て……応援してくれる
継父のためにも
父上の仇・工藤祐経を
討って……

武門の誉れを世に
轟かさねばならない！

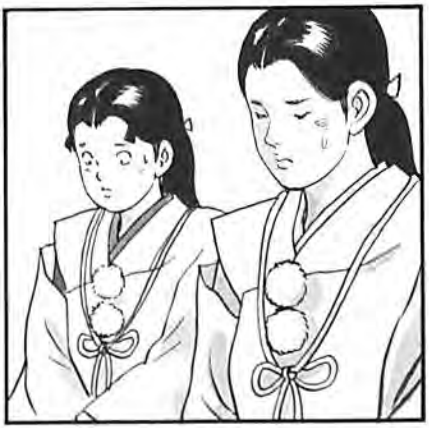
……また難しい
事をいう

さあ……余計な事を
考えずにかかってこい！

おう!!

河津三郎祐泰の遺児
壱萬は五歳、箱王は三歳――。
祐泰の死後、兄弟は
伊東祐親の命で母の満江と
ともに、曽我の豪族・
曽我太郎祐信のもとに
養子として預けられていた。

●兄弟の継父・曽我祐信は、頼朝挙兵の折に敵対したが、後に許された。兄弟の祖父・祐親の妹の子で小田原曽我の領主だ。



●工藤祐経は若い頃から京で学問をしたこともあって、和歌や舞曲に通じた文化人となった。そのため、無骨者が多い鎌倉では目立った存在となり、やはり京育ちの頼朝からすこぶる寵愛されたという。

●文治元年（1185）に元服し、曽我十郎祐成と名乗る兄とともに北条時政邸を訪れた箱王は、時政を烏帽子親として元服した。建久元年（1190）のことで、曽我五郎時致と称した。時政の先妻が実父の祐泰の姉であった縁によったのだろう。

伊東荘は、二人の祖父・伊東祐親が命がけで守り通した土地だったが、皮肉にも争いの発端になった仇敵・工藤祐経が支配する土地になっていたのである。

●宿の遊女と親しくなれば、鎌倉―伊豆を往復する祐経を狙う機会に恵まれると考えた十郎は、小田原・酒匂・国府津・大磯の宿を訪ねる。「大磯の虎」との出会いの伝承だ。

●討ち入りを決意した十郎・五郎の兄弟は、母の元へ最後の手紙を書き、供に連れてきた下人の鬼王丸と道三郎に形見の品々とともに託した。二人とともに切り込む覚悟の鬼王丸と道三郎を叱りつけて曽我へ旅立たせたと『曽我物語』に記されている。

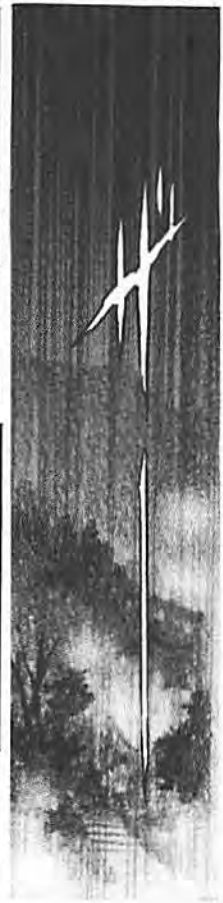
富士の裾野の巻狩りの最終日前夜は、しのつく雨に見舞われた。

何者ッ!?
あたら人を斬るつもりはない!!
我々の狙いは工藤祐経ただ一人

●「止どめは敵討の作法」と、五郎が祐経の止どめをさした刀は、かつて箱根権現で祐経に与えられた赤木の柄のものであったという。本懐を遂げた兄弟は、鎌倉殿頼朝が君臨する今は逃げ切れるものではないと、切り死にの覚悟を固めて討って出る。

弟……
曽我五郎時致!!
父・河津三郎祐泰の
仇を討つべく罷り出申した
……お覚悟!!
……
……!!

●討ち入りの決行日は旧暦五月二十八日の深夜。折からの梅雨の中で屈強の武士たちが切り伏せられたが、仁田忠常は縁者の手で成仏させようと十郎を討った。



祐経を見事討ち果たした後、十郎は打ち死に……、

五郎は捕縛後に斬首――。

だが……、

その一件を自ら調べ上げた頼朝は――、

●十郎の最期を知った五郎だが、激しく攻め立てられ、頼朝の館の中に飛び込んだ。そこにいたのが女装をした大力の童「五郎丸」で、五郎の一瞬の油断を見澄まして組みついた。さすが大力無双の五郎も捕えられ、ついに尋問の場に据えられる。

徳川直参の旗本の十五家の伊東家などがよく知られている――。
また祐親流の子孫を名乗る伊東氏もある。祐清の弟の子孫あるいは五郎の子孫であるというものも記録されている。
さらに伊東を名乗らなかった子孫もいると伝えられている。
さても長き物語なれどこれにて幕と相成り候う。
祝着　祝着……!!

伊東むかし物語◆完

ふるさとコミック

# 伊東むかし物語～伊東祐親の時代～

●著者プロフィール●
松久壽仁■昭和24年（1949)、北海道に生まれる。桑田次郎（現二郎）氏のアシスタントを経て独立する。代表作には「哀愁荒野」（梶原一騎原作)「Ｉ餓男」(小池一夫原作)「野菊の墓」(伊藤左知夫原作）等がある。
綿引勝美■昭和21年（1946)、東京に生まれる。まんが編集の傍ら、科学・歴史の啓蒙書やまんが原作を書く。代表作には「ドラえもん不思議サイエンス」(藤子・Ｆ・不二雄と共著)「藤原王朝」等がある。
嶋田眞之■昭和21年（1946)、兵庫県に生まれる。少年向けテレビ映画のシナリオを多く手がけた後、まんが原作に手を染める。きり・きりこの雅名で書いた「道連れ弁当」(ありま猛画）はベストセラーとなる。

●企画・製作●
ＮＰＯ法人・伊東市文化財史蹟保存会
〈ＮＰＯ法人・伊東市文化財史蹟保存会の概要〉当法人は、昭和51年に設立されて以来、周辺地域の文化財史蹟の保存及び啓蒙を行ない、よって郷土愛を培い、更には地域の伝統芸能、伝統文化の支援、育成を目的とする特定非営利活動の団体です。
●編集制作●
メモリーバンク株式会社
〒151-0053東京都渋谷区代々木２－27－13
オカダマンションＧ－６
電話03－3370－9592
綿引勝美 綿引りえ子 磯貝和宏 江口俊真
●装幀●
綿引麻美
●制作協力●
ＮＰＯ法人・伊東市文化財史蹟保存会“教育推進事業特別委員会”、伊東市教育委員会
●写真提供●
ＮＰＯ法人・伊東市文化財史蹟保存会
●協賛●
伊東市

●参考図書資料●
「伊東市ゆかりの伊東一族の人びと」「伊東風土記」（以上、加藤清志著、サガミヤ刊）「伊豆武将物語」(小野眞一著、明文出版社刊)「伊豆歴史散歩」(沢史生著、創元社刊)「伊東の今・昔」(伊東市史編さん委員会刊)「私たちの郷土　伊東」(伊東市観光課・伊東観光協会刊)「伊東温泉　史跡と文学散歩ガイドブック」(伊東市役所観光経済部観光課企画編集)「ゆったり湯のまち伊東ウォーク」(伊東市健康保養地づくり実行委員会刊)「源頼朝のすべて」(奥富敬之編・新人物往来社刊)「源頼朝」(永原慶二著・岩波書店刊)「歴史誕生10　頼朝奇跡の復活」(ＮＨＫ歴史誕生取材班編、角川書店刊)「日本の古典　義経記　曽我物語ほか」(池田彌三郎監修、世界文化社刊)「曽我物語の史実と虚構」(坂井孝一著、吉川弘文館刊)「図説　静岡県の歴史」(永原慶二・海野福寿編、河出書房新社刊)「静岡の歴史百科」「静岡県の歴史百話」(以上、静岡県日本史研究会著、山川出版社刊)「日本の絵巻　平治物語絵詞」(中央公論社刊)「週刊神社紀行　三嶋大社　箱根神社　伊豆山神社　伊豆・箱根路の三社詣」(学習研究社刊)他。

ふるさとコミック伊東むかし物語～伊東祐親の時代～

2004年３月30日　初版第１刷発行

著者　綿引勝美・嶋田眞之・松久壽仁
©Memory Bank 2004
発行　ＮＰＯ法人　伊東市文化財史蹟保存会
〒414-0038　静岡県伊東市広野４－４－19
電話(0557)36－7726
印刷・製本　伊豆新聞社

プロローグ　火の国・伊東
第一章　悲劇の始まり　頼朝配流と伊東一族
第二章　祐親の最期　頼朝の旗上げ
第三章　曽我兄弟の物語　命をかけた仇討
エピローグ　その後の伊東一族